



企業経営の意義

企業経営漫談士 岡野実空

「企業」とは、営利を目的とした事業を継続的に行う組織。また「経営」とは、それを計画的かつ効率的に遂行すること。したがって「企業経営」とは、「社会が求める価値を提供する営利組織を、継続的かつ計画的に運営すること」です。またそこに所属する人たちは、経済的な対価だけでなく、個人単独では果しえない「自己実現」や「共同体」という感情の「場」としての価値も求めます。

今回のコラムは、「企業経営の意義」を、「社会」との関係、「組織」そのもの、さらに「個人」の欲求という3つの視点から考えます。

視点1：社会

社会がまず企業に求めるのは、それが生み出すモノやサービスによる「価値」提供。またその役割を果たせなくなった場合は、市場から退場するというのが、資本主義社会の基本的なルールです。

「利益」はそのために必須な条件の一つ。顧客が求める「価値」を提供するためには、ヒトを筆頭にさまざまな経営資源が必要ですが、新たな「価値」を生み続けるには、そのさらなる調達に資金が必要です。また事業に使用した地域や国のインフラの対価として、納税などの義務をしっかりと果たした上、その元手を提供してくれた株主に、株価や配当などで十分報いなければなりません。これこそが世にいう「株主主権」のあるべき姿です。

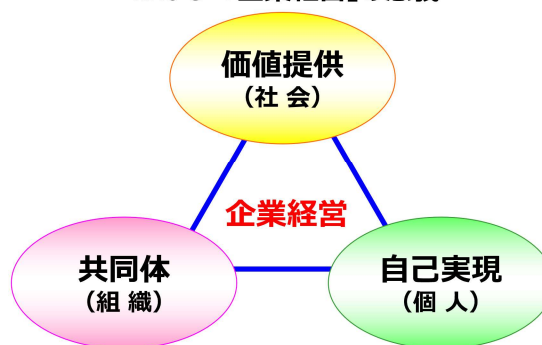
ところがいま世界の投機守銭奴たちは、それを自分の取り分増と曲解し、他人の分け前を大幅に削減して、社会の格差を拡大しているのです。

視点2：組織

日本では、人の住むところ、すなわち「世間」の意である「人間」(じんかん)を、人格を持つ社会的な存在の「にんげん」としても使い、その関係を大事にしてきました。その集団としての「会社」は、江戸時代後期に「会所」と「社中」を合体した和製漢語で、本来は「同じ志を持つ仲間が集まる団体」の意味でした。その後、society「社会」、company「会社」の使い分けが定着したため、「営利目的の社団法人」の意味となり、いまに至っています。

私たちが、「我が社」や「ウチの会社」と言うのも、「企業」より人間くさい「会社」の方に親近感を覚えるから。特に第二次大戦後の都市化に伴い、地域に代わる「共同体」として、企業は社会で大きな役割を果たしてきました。高度経済成長期の反動で、いまはその意義がややないがしろにされていますが、現代や未来にふさわしいそのあり方は、もっと積極的に模索されなければなりません。

KM0-3 「企業経営」の意義



視点3：個人

本屋に並ぶ「成功本」の主人公たちは、組織に頼らず自立できる、社会人の中の例外。また「企業人」の成功物語は、多くの社員の尽力によって実現できたことを、著者独りの手柄にした横領物語が大半です。(著述もライターや秘書の代筆)

それに対し、ふつうの社会人は組織に所属し、その中で自分のやりたい仕事を見つけ、それをつづじて自己実現を果たそうとします。そのため「〇員」という立場に甘んじざるをえませんが、その忍耐に対し組織は、報酬や「〇長」という呼称で報いてきました。また人間的な成長も含め、企業は個人の「自己実現」の場として機能してきたのです。

元々「企業」も、英語“enterprise”を翻訳した明治期の和製漢語。その後、当初の「事業を企てる」という意味で「起業」という漢語が作られたため、「組織」の意味のみで使われるようになりました。

2018年は明治150年。いま激動の時代を生きる企業人は、元の「会社」の意味を再認識するとともに、本来の「起業」を追求し続けるより他に生き残る道はありません。我が国の場合、その中核に居るのは、昔も今もミドル諸氏。皆さん、この際やるしかない！トコトやるしかない！！顧客やライバルから、「〇〇、半端ないって！」と言われるまで。

2019年7月4日(初出平成30年7月2日) 実空